

“学びをひろげる わたしと〇（まる）人の会” 第31回研究会まとめ

「聴くということ」に寄せて—私の場合—

2019年9月14日 関山域子さん提案（小学校の心の相談員）

関山さんは、「私が人の話を聞けていないなんて自覚を持ったことは、2000年までは全くなかった。あることが起こり、直面して、大わらわになって、私にとっての大地が鳴動した。そこで初めて、自分はきいていなかった～、心を砕いてこなかった～、と。以来、自分の生き方を問うてきた。そんな過程を経て18年、『聴くということ』の重要性を実感させてもらっている。」といわれる。

「心の相談員」という立場で、子どもたちや保護者や教員たちと向き合うときも、或いは日常のなかで人と関わり合うときも、決して「聞いてあげる」という上下関係ではなく、対等の関係で相手の言葉を受け取り、また自分の言葉を届けようとする、それを人との関わり方の関山さんの作法・流儀とされているように思えました。



だから、今回の“学びの会”の提案でも、まず「自分を語り」、そして初めて実践を発表し、参加者の意見を聞き、話し合うことができるのだと、自分に課している厳しさを感じました。

参加者から、個人史や家族のこと、今まで人前で話したことがないことなどが語られたのも、関山さんが生み出す「聞き合う関係・語り合う関係」という舞台、雰囲気、空気が引き出したのかもしれませんが。

普段、あたりまえのこととして顧みることのない「きく」ということですが、そのことのもつ重大さに気づかされる体験をしました。

松井さんの感想も、関山さんの「聴く」が引き出したのではないかと、私（松森）は考えています。

松井直哉

今回の関山さんの報告を聞きながら、私は私が教員になりたての頃、先輩から聞いた言葉を思い出していた。

「誰もが笑顔で登校するのではない。ランドセルいっぱい悲しみを詰めて登校する子もいるのだ。」という言葉だ。そしてさらに「ランドセルに入りきる悲しみなら、まだましなのかもしれない。」とすら思ってしまった。それほど重い現実がいくつか紹介された。

参加者の中からもかなり重い話も出てきた。

私の身の回りでも自死した者、未遂の者がいる。それとは別に、私の教えた生徒のうち2名は自死したと伝え聞いている。私を含めて誰かが何とかできたのか、それとも誰も何ともできなかったのか。誰もが「愛してほしいっただけ」なのかもしれない。「自分を認めてほしいっただけ」なのかもしれない。

人間を苦しめているものは何？人間社会のありよう？個人の意地の悪さ？大昔なら人間を苦しめる一番の敵は「自然」だったのかもしれない。でも、人間にとって自然が脅威だったころは、逆に人間どうしは結束が強かったような気がする。現在も自然が脅威であるということに

は変わりはないが、少なくとも今の日本では、人間を苦しめているのは一番に「人間」のような気がする。

相手を苦しめようという意図がなくても、結果として苦しめてしまうことはよくある。自分が苦しいから他人を攻撃して自分を保つということもよくある。そして、大人と子どもの関係では、子どもは圧倒的に苦しめられる側になる場合が多い。

このような、人間が人間を苦しめるという状態はどうしようもないことなのか？

何ともできないかもしれないが、話を聴くことで、その人の心の整理ができれば、もしかしたら少しは何とかなるかもしれない、という営みが「カウンセリング」なのだろうな、と思う。

となると、カウンセラーに限らず、誰もがお互いに相手の思いを聞く（聴く）機会をもっと増やしたら、意図的に相手の言葉に耳を傾け合えたら、お互いが感じている苦しみは少しは軽くなるはず。

それができないのは、例えば教育現場の余裕のなさ、例えば教育現場の強烈な学力主義、・・・等々いろいろな考えられるが、取りあえず、年寄りの子守りはそれをしやすいはず、と自分の行動に反映させようと思う。



松井さんの「お互いに相手の思いを聞く」「意図的に相手の言葉に耳を傾ける」のは、「とりあえず、年寄りの子守りはそれをしやすいはず」という言葉は身に染みました。ほんの一昔前には、きっと年寄りも地域の子どもたちのおしゃべりを「聴く」役割を担っていたのではないのでしょうか。時には、こっくりこっくりと目を閉じて居眠りもしながら。年寄りである私もそんな「聴き手」になれたらなあと思います。

“学びの会”では、今後「話す」「対話する」という課題について進めていきたいと考えています。